

10. 外国より持ち込まれた麻疹症例と接触者の追跡

松岡裕之、田中由嘉里（長野県飯田保健福祉事務所）

羽場洋平、白澤知子、望月信子、寺井直樹（長野県伊那保健福祉事務所）

南 恵子（長野県介護支援課）、笠原ひとみ、西垣明子（長野県保健・疾病対策課）

キーワード：海外渡航、接触者健診、麻疹ウイルス、麻疹ワクチン

要旨：自然感染の激しかった時代以降に生まれ、予防接種の制度および方法が不十分な時代に乳幼児期を過ごしてきた世代では、麻疹ウイルスに対する防御免疫が不十分または皆無である。今般インドネシアで罹患して帰国し、長野県内で発症した患者（26歳）が、兄弟姉妹また夫婦間で感染を起こした事例を経験した。彼らは同じ部屋で宴会を催しており、11名中3名（33歳、35歳、35歳）が発症した。60歳以上の3名、また10歳未満で予防接種を受けていた4名は発症しなかった。初発患者の接触者総数は300名を越えたが、職場や商店・飲食店など、空間が広くまた立ち寄った時間の短い場所における接触者から発症者は出なかった。発症3日目に訪れた医療機関の待合室で同室だった67名のうち1名から発症者（24歳）が出た。

A. 目的

50年前まで麻疹は感染・発症・自然治癒により終生免疫を得る疾病であった。しかし昨今では予防接種により免疫を得る疾病となり、乳幼児期の2回接種により感染予防に必要な抗体（防御抗体）が得られる。予防接種の制度および方法が不十分だった時期に乳幼児期を過ごした人たちに麻疹発症例が出ることもある。今般、伊那保健所管内を中心に麻疹患者（計5名）が出たので、経緯を報告する。

B. 方法

① 事件の探知

最初の患者は26歳女性。2017年2月末から3月4日までインドネシア共和国・バリ島に夫とともに観光旅行に行った。帰国後14日ののち、38度台の発熱に襲われた。翌々日には体幹部に発疹を伴う発赤を生じたため、管内A医療機関を受診した。口内にKoplik斑を認めたため麻疹と診断され、伊那保健所に対し麻疹発生届が提出された。患者は自宅療養となったため保健所から所員が出向き、血液、尿、咽頭拭い液を採集し、また渡航歴、行動履歴、予防接種歴などの聞き取りを行った。長野県環境保全研究所に検体を送りリアルタイムRT-PCR法により麻疹ウイルスの存在を確定した。

② 保健所による調査

発症日を3月18日と決定し、その前日の行動から聞き取りを行った。17日は某職場の工場で終日作業をしたため接触者数は96人に上った。18日は夫とともに車で上高井郡小布施町まで上り、両親兄弟姉妹またその家族らと宴席を持った（濃厚接触者11名）。ドライブ中に立ち寄った商店・レストランの名称を聞き

取り、店主らに依頼して従業員ら（83名）を接触者として扱ってもらった。また報道機関に依頼して、不特定の利用客に呼びかけを行った。宿泊施設にも協力を依頼し、従業員・当日の宿泊者を接触者として扱った（59名+6団体）。臨床診断を受けた3月20日に管内A医療機関を受診していた患者の名簿を提供してもらい、受診者および同行者に対し麻疹患者の接触者として連絡を取った（67人）。とくに長野県外在住の受診者に対しては、長野県を通じてそれぞれの自治体保健所に依頼を出し、接触者として扱う旨連絡および説明をしてもらった。接触者の総数は300名以上になった。彼らに求めたのは、毎日の体調の記載、体温測定とその記録で、接触のあった日から21日間続けてもらった。期間中に発熱や発疹が出たときは、医療機関に電話で連絡し、一般の人たちと接触しないように配慮したうえで受診してもらうよう説明した。麻疹の診断は臨床診断にとどめず、血液、尿、咽頭拭い液などの検体から麻疹ウイルス遺伝子を検出したことをもって診断とした。

C. 結果

観察期間中、麻疹の発症者は宴会に参加した家族から3名（姉、兄、夫）が出た。宴会に出ていた家族の中で60歳代の両親、88歳の伯父、10歳未満の甥や姪（麻疹ワクチン2回接種済み）らは発症がなかった。職場、商店、飲食店などからも発症者は出なかった。しかし伊那中央病院救急部で接触があったと考えられる症例が1名報告された（図1）。この症例以降、新たに麻疹と診断される症例は報告されなかった。最後の症例が治癒と判定された4月12日から4週間後、5月10日をもってアウトブレイクの終息と判定した。

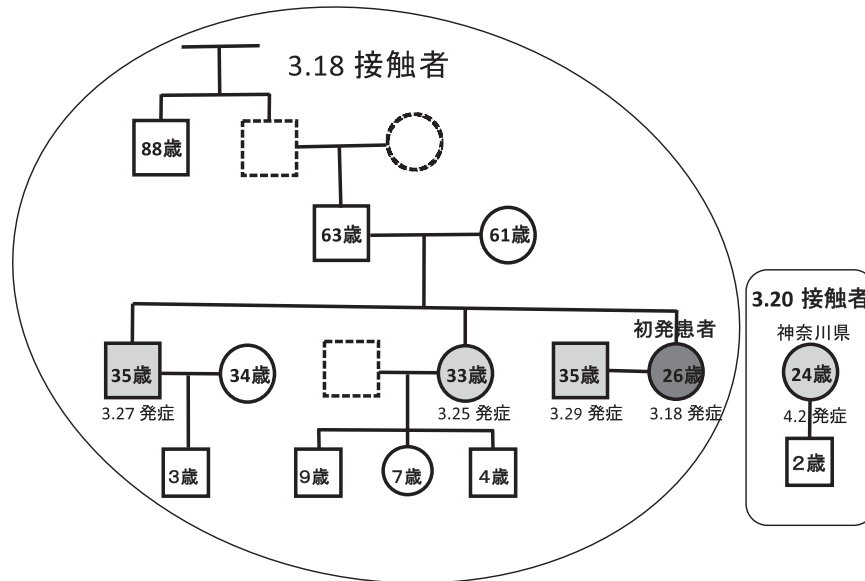


図1 麻疹発症者5名の関係
初発患者は黒塗りで示した。インドネシアで感染したと考えられる。続発患者は灰色で示した。3.18の宴会時に初発患者から感染した3名、初発患者が3.20に管内A医療機関を受診した時、待合室等にて感染したと思われる1名。白抜きは初発患者との接触はあったものの発症しなかった人たち。破線の人たちは3.18の宴会に不参加だった。

D. 考察

麻疹ウイルスは感染力が強く、感染を受けると発症は100%とされている。今回発症は宴会に出ている人たちから多く出ている。過去に感染を受けたことがあると思われる60歳代の両親、88歳の伯父、また予防接種を受けていた甥や姪に発症は見られなかった。感染による免疫の持続は60年以上に及ぶものと思われた。また予防接種2回法は有効な免疫を与えていると思われた。感染力が強いといわれる麻疹ウイルスではあるが、一定以上の密度・時間をもって接触することで感染に至るものと類推された。病院待合室で感染を受けた者が1名とはいえ出たことから、接触者の設定は十分広い範囲に取っておくべきであることを教訓として得た。

E. まとめ

外国で感染し長野県内で発症した麻疹症例を経験した。発症日前日からの行動を詳細に聞き取り、接触者を決定した。総数300名余について21日間、体調の記載、体温の測定・記録をしてもらった。初発患者の発症日に一緒に食事をした10名中3名に発症が見られた。60歳以上の3名および予防接種を受けていた10歳未満の4名は発症しなかった。発症3日目に医療機関を受診したとき待合室を共有した67名のうち

1名に発症が見られた。発症したのは5名とも20歳代、30歳代であった。

F. 利益相反

発表者全員、利益相反はない。

G. 参考文献

国立感染症研究所感染症疫学センター：麻疹発生時対応ガイドライン [第二版：暫定改訂版]，2016.
https://www.niid.go.jp/niid/images/idsc/disease/measles/guideline/guideline02_20160603.pdf